

心つないで

41

発行

2012年8月31日

東日本大震災

ろっこう医療生協・対策本部 本部長・金丸正樹

(ろっこう医療生協・本部内 078-802-3424)

振津かつみ医師の講演会に 110人が参加、被ばくと支援を考える

「福島は今どうなっているのか」「原発事故の収束は?」という疑問に応えようと8月30日、オープンセミナー「福島の放射能汚染と被ばくを考える」を兵庫県福祉センターで開催し、平日の昼間にもかかわらず会場一杯の110人の参加者が詰めかけ熱心に学び合いました。

講演の中で振津先生は概要、以下のように述べられました。
「フクシマ事故から一年半経つが被災現地では問題が山積み状態。事故は未だ『収束』せず。私たちは次の世代に『負の遺産』と向き合うという課題を残してしまった。」

「被災地での問題は多岐に亘る。食品汚染、子どもの学校生活、除染問題、健康管理、避難・保養などなど。家族の関係さえも損なわれたりすることがある。」

「被災地では、政府・電力会社、『原子カムラ』の専門家による、放射能汚染と被ばくの過小評価、現実の汚染のリスクを覆い隠そうとする宣伝がされている。昨年10月、文部科学省から『放射線教育副読本』が出され全国に配布されているが、非常に問題が多い内容。フクシマ事故やチェルノブイリ事故の記載は一切ない。これでは子どもたちの健康を守れない。それを批判した冊子を発刊した。」

「支援はまだこれからが大切。子どもの保養や、関西への避難者への支え、さらにこのように被ばくについて正しい理解を深めることも支援につながる。フクシマを『核時代の終わり』の始まりにしよう」と訴えられました。【以上、文責は事務局】

質疑応答も、時間が足りないほどたくさん出され、参加者からは「何も知らない、知らされないで普通に生活させられていることは恐ろしいことだと改めて感じました」「今後も定期的にこのような勉強会の機会があればありがたいです」などの感想が寄せられました。

対策本部としては、今後もこうした機会をつくっていく予定です。



「チェルノブイリの教訓を学び、さらに支援を」と訴える振津先生

振津先生はこのたび、反核の国際的な賞である「核のない未来賞」を受賞されました。今まで日本人では秋葉忠利前広島市長や写真家の樋口健二さんが受賞されています。この日、主催者を代表し近藤総師長から振津先生に花束が贈られました。

フクシマを「核時代の
終わりに」の始まりに

振津先生の共著

「放射能の危険と人権」700円を
販売しています! 対策本部まで。



職員も取り組みを報告

講演会の後半では、「ヒロシマ行動」「大船渡支援行動」について参加した職員から、それぞれスライドを使って詳細な活動報告がありました。【写真・右】



(ヒロシマ行動の報告をする上田佳代・看護師)

【うら面に、新聞記事掲載あり】



(大船渡支援行動の報告をする羽田野祐司・組合員活動支援部管理者)